

スポークスマンの場合、問題となっている選手の帰国をめぐって「その因果関係を述べているということ」、そして不倫の妻の場合、疑ってかかる夫への答えとして「すべての不適切な関係について述べていること」が、それぞれ前提となって解釈が誘導される。その結果、聞き手が「過去においても女性関係はなかった」、「帰国の理由は身内の不幸だった」、「いかなる形の不倫もなかった」と、聞き手が結論に至ったとすれば、騙そうとする話し手の意図は見事に満たされたことになるし、聞き手はまんまと騙されたことになる。但し書が与えられない、つまり種明かしがない限り、騙しの談話はここで完結することになる。途中で起動したデフォルトの前提は、あくまでもデフォルトの前提として、その役割を終える。¹⁸

ところが、何かの理由で聞き手が但し書を発見した（あるいは、種明かしされた）とき、直ちにデフォルトの前提は無効だったことがわかり、同時にその前提が起動するように話し手が意図的に自分を導いた（つまり、ミスリードした）ことに気づく。言い換えると、聞き手は、デフォルトの前提が健全なものではなく、話し手にとって都合のよい「擬似推意」へと（不覚にも）誘導されていたことを、この但し書（種明かし）により認識するのである。¹⁹

8. 真理デフォルト (Truth-default) という特徴

発話の解釈を促す、このようなデフォルトの前提と対（つい）にして考えたいのが、「真理デフォルト」(Truth-default) と社会心理学で呼ばれている私たちの性向である。すなわち、人間は他人のいうことが真実であると信じることを出発点としてコミュニケーションを進める (Levine 2014:378)。確かに人間は社会的な存在であり、他人の発言を疑ってかかることほど非効率的なコミュニケーションはない。逆に、騙される危険性があるというデメリットがあるにもかかわらず、相手が誠実 (veracity) で真実を語っているという想定 (=真理デフォルト) は効率のよいコミュニケーションをもたらす、これは通常デメリットを補って余りあるメリットをもたらすとされる (Levine 2014:385)。

さらに、ここでは、第1節で触れた Coleman & Kay (1981) が指摘するウソを構成する3要素の論理的含意関係を思い出そう。つまり、「事実に反すること」が「(相手が) その内容を信じていないこと」を、さらにそれは「相手を騙す意図はないこと」を論理的に含意する、という関係である。これを裏返すと、「事実であること」からは、「(相手が) その内容を信じていること」、さらには「相手を騙そうとしていない (=誠実である) こと」が論理的に引き出される (図3を参照のこと)。つまり、まず発話の内容が真である (真理デフォルト) と考えることによって、話し手の信念と誠実さまでも玉突き式に想定することが可能となり、コミュニケーションを進めるのに必要な労力が (少なくとも、そうでない場合よりも圧倒的に) 軽くなるのである。

このように、発話に関して、まずはそれが真である（デフォルト真理）と考え、意味が不足する部分については、常識（百科全書的知識）にもとづくデフォルトの前提を起動させることにより、コミュニケーションは円滑に展開する、と考えるのである。

9. 語用論の枠組み（Relevance & Gricean Frameworks）の不備

ここまでの議論を要約すると、騙しの談話、とりわけ相手をミスリードする発話には、1) その解釈に必要な話し手と聞き手の間の了解事項としてデフォルトの前提が起動すると同時に、2) 何らかの理由で種明かしがあった時点で、その前提が実は無効で、読み取ったメッセージは話し手の悪意に誘導される擬似推意であったことが判明するという、いわば二段構えの解釈プロセスが関わっている（もちろん、話し手の思惑通り、聞き手がミスリードに気づかないまま談話が展開すると、2) のプロセスは起動しないまま終わる）ということである。

この種の談話は、話し手が誠実ではないため、これまでの語用論の枠組みでは、およそきちんと説明されていない領域である。たとえば、「協調の原理」(Cooperative Principle) を大原則とする Grice (1989:26) にしたがうと、話し手がこの約束を明々白々な形で (blatantly) 破った場合にのみ「推意」が生成されると考え、聞き手に気づかれないように破る事例には、Violating という用語が用意されてはいるものの、それ以上の議論にはつながらない（し、それ以上の議論は求められない）。なので、そこで誤って聞き手が読み取ったメッセージは「推意」でないことは確かだが、その名前さえつかなかった。本論ではそれを「擬似推意」と名付けたが、そもそも、ミスリードとは、話し手が悪意をもって協調の原理に背いている不誠実な談話であるから、議論の土俵にものぼらず、伝わるメッセージに名前さえないのは仕方がないのである。

一方、Grice 流の語用論とは一線を画す関連性理論 (Relevance Theory) ではどう扱われるのだろうか。この枠組みでは、発話の解釈に必要な労力はできるかぎり少なく、対価として得られる情報量（「文脈的効果」(Contextual effects)）はなるべく大きくなるよう（「最適の関連性」(Optimal relevance) が得られるよう）発話がなされると考える。したがって、

- (15) The employees at the baker's gathered round **the dough**.
 (16) a. The employees at the baker's gathered round **the bread dough**.
 b. The employees at the baker's gathered round **the money**.

(16b) を伝えたい「理性的な話者」(Rational speaker) がパン屋の従業員について語る場面で、多義語である dough (bread dough / money) を使うことによっては、無用な混乱を引き起こす。つまり「パン」のことなのか「お金」のことなのか、聞き手が解釈に迷う事態が予見される。なので、最適の関連性を保証するために、話し手は最初から money という言葉を使うはずだ、というのが関連性理論の基本姿勢である。²⁰

ここで重要なのは、コミュニケーションの主体が「理性的な話者」だという点である。本論で扱う、相手をミスリードするような話し手は、道義上まともな人間とは言い難いが、他方で人を騙す頭（知恵）をもっているという意味では、それ相応の理性を持っている人間かも知れない。要するに、「理性的」をどう定義するかにかかっているのだが、ここではその話し手が理性的だと仮定しても、最小の労力で最大の効果（＝最適の関連性）を保証している話者とはい

えない。相手に無用の混乱を招くことなく（つまり、余計な労力を要求しないで）メッセージを伝えようとはしていないからである。それどころか、むしろ聞き手に対して無用の（自分にとっては好都合な）混乱を引き起こすことが、話し手の主たる狙いである。したがって、相手をミスリードする発話は、基本的に関連性理論の射程には入らないし、それゆえ騙しの談話そのものが分析の対象になることはあり得ないのである。

しかし、Grice 流の枠組みでも関連性理論でも扱えないとなると、ミスリードに代表される騙しの談話は、おおいに文脈・場面に依存した発話とその意味を含んでいるにもかかわらず、語用論の土俵には乗らないというジレンマに陥ってしまう。実際に、語用論の文献ではウソ (Lies) や騙し (Deception) が話題にのぼることは、まずない。そのように門前払いを喰らってしまう特性を騙しの談話が内在的に抱えていることを（再）認識することが、ここでは重要である。

では、ウソや騙しを語用論の土俵に引き戻すには、どうすればよいか。先に見たように、相手をミスリードする発話には、まずデフォルトで起動した前提のもとで一定のメッセージが算出され（第1ステップ）、のちにその前提が破棄されたと判明したときに、そのメッセージが実は「擬似推意」であったことに聞き手が気づく（第2ステップ）という、いわば二段構えのプロセスが隠れていた。また、これも前節で述べたように、人は実際の真偽に関わらず情報が真実であることをデフォルト（出発点）として物事を判断するという「真実デフォルト」(Truth-default)の習性をもっている。両者を重ね合わせると、「日常の談話は特別な断り書き(但し書)がない限り、世の中は変わりなく推移しており(デフォルトの前提)、入ってくる情報も真(真実デフォルト)と考えでよい」となる。

ここでは、「関わっている会話の目的あるいは方向にしたがって、発話の時点で必要な貢献をすべし」という Grice の「協調の原理」とその公理群(質、量、関係、様態)に改めて注目したい。なんとなれば、(誠実な)日常談話の約束事は、結局のところ、協調の原理とその傘下にある公理群にその起源を求めることができるのが合理的だからである。これまで、騙しの談話が語用論の土俵にのぼっていないのは、枠組みそのものがまだ十分にリファインされていないことに起因すると思われる。

たとえば、次の文

(17) He handed her the scalpel. [A SECOND LATER] She made the incision [WITH THAT SCALPEL].

(18) I have had lunch [TODAY].

(17) の大文字で補足された部分は、関連性理論では「意味充足」(Saturation)、(18) は「自由富化」(free enrichment) と呼ばれている解釈操作である。²¹ 前者はふたつの事象が並記されたときに私たちが常識(百科全書的知識)を動員して補う意味であり、後者が「(生まれて以来)これまでに昼食をとった経験がある」という意味にならないのも私たちの常識(百科全書的知識)に負うところが大きい。²² こういった、いわば意味補充のプロセスは、そもそも言内の意味レベルなのか、あるいは推意レベルなのか、あるいはその中間に位置するのか、理論上の議論はさまざまではある。しかし、「意味充足」も「自由富化」もまた、これまでの議論に沿って説明を試みるならば、「何らかの但し書が入らない限り、世の中がいつも通りに推移している」との条件のもと、発話や談話が適切に成立するために必要な情報として、それぞれデフォルトの

前提があえて書き加えられたものだと考えることができよう。²³

10. 手続き的意味の存在と協調の原則

このデフォルトの前提が立ち上がるお膳立てとして、「世の中がいつも通りに推移しているという」条件は、発話の解釈を正しい方向で行うための、いわば手続きのようなものといえる。ここでは、ちょうど命題の解釈に際して、概念的意味 (Conceptual Meaning) と手続き的意味 (Procedural Meaning) にわけて考える関連性理論の枠組みが参考になる。²⁴ たとえば、*in fact* というフレーズは、先行する談話で誘導された「尺度の推意」 (Scalar implicature) を、次の発話がキャンセルすることを「予告する」マーカーとして機能する。たとえば、(19) では、

(19) He is a good detective, *in fact*, a very fine one.

good detective という表現 (「有能な刑事」) から、*not very good/ fine* (「とても有能な刑事とはいえない」) あるいは、*not excellent* (「優秀な刑事とまではいえない」) という「尺度の推意」が誘導されるが、直後にその推意を打ち消す内容である「とても有能な刑事だ」が現れるため、*in fact* はそのことの予告をして、「直前の推意を打ち消すことになるけれど、実は」という意味で解釈するよう、聞き手を誘導している。解釈を一定方向に誘導するという意味で、*in fact* は「手続き的意味」を担っているという。この手続き的意味の特徴は、(関連性理論的に言うと、最適の関連性を確実に保証するための、目に見えるマーカーではあるけれども) 必ずしもなくても (聞き手の推論を介して) 同じ意味がほぼ伝わる、という点である。上記 (19) の例では、

(20) He is a good detective, a very fine one. — P. Cornwell, *Post-mortem*

もほぼ同義として通用する。ちなみに英語では手続き的マーカーがない場合でも、ほぼ同じ意味が伝わるとされるが、日本語では非常に前後の繋がりが悪くなる。(21) と (22) を比べると違いは歴然としている (山本 2002:59)。

(21) 彼は有能な刑事だ、とても有能な。

(22) 彼は有能な刑事だ、というか (もっと正確には) とても有能といい。

つまり、「手続き的意味」は明示的に談話標識のような形で現れる場合 (19) と、聞き手 (受け手の) の推論に任されて暗示的な形で存在することが可能 (20) ということである。

本論で扱っている、相手をミスリードする発話において、デフォルトの前提が立ち上がる部分は、まさに前後の関係を円滑につなぐために必要な「手続き」にしたがっているのであり、それは *in fact* のような明示的なマーカーが用意されているものとは異なり、一般的には談話標識が与えられない。なぜならば、それらは「特別な事情がない限り」想定してもよい (想定すべき)、文字通りデフォルトとしての手続き的意味だからである。反対に特別な事情が生じた場合にのみ、話し手には但し書として特別な手続きを明示することが求められる。先のミスリーディングな発話の例では、それぞれ (繰り返しになるが)

- (23) ただし、制度上も人的資源的にも可能である場合に限り（学部長）
- (24) ただし、この現在時制は普遍の真理を表すのではなく（クリントン）
- (25) ただし、二つの事情は因果関係ではなく（スポークスマン）
- (26) ただし、不倫と考えられるケースを網羅しているわけではなく（不倫女性）

といった、解釈の手続きに関する但し書が添えられてはじめて、誠実な発話が成立し、そこから正確な意味が相手に伝わる場所である。²⁵ もちろん、騙しの談話は相手をミスリードすることが話し手の意図するところゆえ、この但し書が談話に現れることはない。

11. 結語

本論では、騙しの談話が文脈・場面に依存した発話とその意味を含んでいるにもかかわらず、「理性的な話し手・聞き手」を前提とする関連性理論では、無用な混乱を意図する発話は分析の対象にすらならないため、また Grice 流の理論では、そもそも会話の大原則としての「協調の原理」に背く発話であるがゆえに、それぞれ語用論の議論になじまなかった（なじみにくかった）ことを概観した。そのような事情のなかにあつて、Levinson (1988, 2000) は、「意味充足」や「自由富化」など解釈に必要な意味の補充プロセスに着目し、これらを（Explicature に分類する関連性理論とは対照的に）「推意」に含めた意義は大きい。なぜならば、(17) の「意味充足」や (18) の「自由富化」の例からも明らかのように、そのプロセスには、意味解釈の前提として「解釈に際して、特別な事情がない限り、世の中は変わりなく推移しており、常識（百科全書的知識）にもとづく推論を介在させてもかまわない」という約束事（＝手続き）にもとづいているからである。もちろん、そこに介在する推論（推意）は、誠実な談話のなかにあつても（あくまでも推論であるがゆえに）間違いであるかも知れない（ので「取消し可能性」が担保される）。他方、騙しの談話では、特別な事情があるにもかかわらず、それにかかる手続き（つまり、但し書き）を話し手が意図的に欠落させたために推意らしきもの、すなわち擬似推意が聞き手に伝わってしまう。この約束事（＝手続き）は、話し手と聞き手が互いに誠実に談話を展開するための基本中の基本であり、Grice の協調の原理がその根底に流れていることは明らかである。

また、騙しの談話を検討するプロセスでもう一つ明らかになった「真理デフォルト」、すなわち話し手と聞き手ともにメッセージが真であることを出発点として談話が展開するという考え方も、Grice がいう「協調の原理」と軌を一にしている。ここでの議論は、相手をミスリードする発話にも対応できるよう、「意味充足」や「自由富化」をも含む操作がデフォルトの前提として起動することを明らかにしたが、学部長、クリントン元大統領、スポークスマン、不倫の女性の談話に絡むデフォルトの前提そのものは、それぞれ「成立条件の非限定性（＝条件なしに）」、「普遍的真実としての現在時制」、「因果関係」、「成立条件の非限定性（＝条件なしに）」など、かなり多様なものであることは間違いなく、これをどう整理するかが今後の課題となる。

脚注

1. Coleman & Kay (1981) の論点は、Lakoff (1987:72-74) も参照のこと。
2. Bok (1978:14-15) は「自分が (真と) 信じていないことを他人に信じ込ませる「行為」(Act) を「騙し」(Deception) と呼び、言葉もしくは何らかの記号を使って言語化された「騙し」を「ウソ」(Lies) と定義している。これにしたがうと、ただし、「ウソ」を言語化されたものに限定してしまうと、逆に「騙し」の範囲が不当に制限されてしまう恐れがある (つまり、言語化されるが「騙し」もある) ので、この見解には与しない。
3. Saul (2012:2)。
4. 推論で得られたメッセージ (推意) は、取り消すことができる。これを「取消し可能性」(Defeasibility) と呼び、推意の特徴とされる。
5. J. Thomas (1995: 73) より引用。
6. 同上。
7. 「会話の公理」については、Grice (1989:26-29) を参照のこと。
8. 同上。
9. J. Thomas (1995:55) より引用。
10. 公理違反を察知することで、文字通りの意味 (Literal meaning) に収まらないことに聞き手が気づき、言外の意味 (推意) を算定する作業 (推論) を始める、というのが Grice の提案であり、その作業が具体的にどのようなプロセスを経て、この例の場合、皮肉というメッセージに到達するのかについて、実は明確な説明はなされていない。語用論の議論において、このメカニズム解明はきわめて重要であるが、本論は、明確な公理違反があったか否かに関心があるので、そのメカニズムについては立ち入らないことにする。
11. Grice (1989:30) は blatancy (>blatant) という語を繰り返し用いて、この「はっきりわかる」、「一目瞭然」の特性を表している。
12. 最近、「忖度 (そんたく)」という言葉が新聞紙上を賑わしているが、「相手の気持ちを推し量る (こと)」であり、まさに推意 (を読み取ること) に他ならない。したがって、相手の発話をもとにした聞き手側の (勝手な!) 推論であるがゆえに、話し手は後に責められても「そんなことを言った覚えはない」と主張することができる。
13. この例がおもしろいのは、その後で A が「だって、まともに着るものがない (だから、貸してくれたっていいじゃない) !」と言って、実は姉の推論 (推意) が凶星だったことを認めているところである。
14. 「偽である」というよりも、(ここでの議論では)「不適切である」の方が正確である。
15. Recanati (2001:80) にしたがえば、「言内の意味」(What is said) も含意された意味 (What is implicated) も、ともに話し手 / 聞き手の意識にのぼるもの (Consciously available) である。ならば、定義上、聞き手の意識にのぼらない騙しの発話 (Deceptive utterance) は、Saul (2012:52) が指摘するように「言内の意味」でもなければ、「明意」(Explicature) でもない。
16. Default inference (あるいは logic) については、Ginsberg (1987:7) を参照のこと。なお、健全な前提のもとでは一つの正しい結論が導き出される演繹法 (= 単調性 (Monotonic inference)) であるのに対して、この種の推論は典型的な事例にのみ有効で、それ以外にはいくつもの結論が可能であることが (= 非単調性 (Non-monotonicity)) が特徴とされ、「非

単調性推論」(Non-monotonic inference)とも呼ばれる。

17. (11)の「いつもなら船員Aはしらふだ」は仕事に携わる人の状態として、私たちの百科全書的知識に合致するが、(12)の「いつもなら船長は酔っ払っている」は、その知識に真っ向から対立する。Bell (1997)が指摘するように、(12)が船長に対する船員Aの「あてこすり」として機能するのは、ここでの議論にしたがうと、船長の常軌を逸した日常の行動を私たちが読み取るからだ、と説明できるだろう。
18. ... lies go unnoticed as long as no trigger event leads to the abandonment of the truth-default TDT(Truth-default theory) Levine (2014:384) Levineのいう「引き金」(Trigger)が、ここでいう「但し書」に相当する。
19. 探偵小説のトリックには、このデフォルトとして起動する前提をうまく活用している事例もある。たとえば、盗まれた金(ゴールド)の所在を示すヒントに“Where is the gold? The answer is in the books.” (*Monk: Mr. Monk Gets Married*)という言葉がある。書棚にならんだ膨大な数の本を目の前にして、「謎を解く鍵は本にある」と言われたとき、私たちは「答えが本に書かれている」ことを暗黙の(つまりデフォルトの)前提として謎解きを始める。しかし、本にはまったく意味不明の言葉しか並んでいない。実は、金はいったん熱で溶かされ、インクの代わりに用いられ、本の膨大な数のページの中に文字として埋め込まれていたのである。つまり、“(be) in the books”とは、「文章として書かれている」という私たちの常識的なリアクションに相反して、「物理的に存在する」という意味だった。このトリックがわかった瞬間に、暗黙の前提は、もはや前提ではなくなり、話し手が私たちにミスリードして意図的に誘い込んだ言外の意味(メッセージ)、すなわち擬似推意であったことに気づくのである。
20. 「理性的な話者であれば、(16b)の解釈が聞き手にとって最適の関連性をもつと期待することはありえない」(Wilson & Sperber 1991:137)
21. 関連性理論では、これらは「推意」と「言内の意味」の間に位置する「表意」(Explicature)と呼ばれる。なお、研究者によって、言外の意味の扱いが異なっているが、その違いをわかりやすく整理した議論として、児玉(2003)を参照されたい。
22. Have you had breakfast? は「今朝、朝食をとりましたか」のように時間の枠が this morning に絞られるのがデフォルト。一方、Have you had sex? は(今朝の話ではなくて「これまでに経験がありますか」のように時間の枠が the whole life として理解される。Taylor (2001:45)を参照のこと。
23. たとえば、Taylor (2001)によると、語用論にもふたつの下位レベルがあって、推論プロセスに入力される前に、与えられた文(発話)を意味的に過不足がないように補充を行う「プレ命題的」(Pre-propositional)過程と、それをもとに実際に推意の算定が行われる「ポスト語用論」(Post-propositional)過程がある。ここで議論の対象となっているのは、「プレ命題的」過程といえる。また、Recanati (1993:260-8)では、「第1次的語用論プロセス」(Primary pragmatic process)と「第2次的語用論プロセス」(Secondary pragmatic process)があり、前者は意識下の概念(Subdoxactic)で非推論系(Non-inferential)、後者は意識にのぼる(Conscious)推論系(Inferential)過程である。本論の関心は、Recanatiの「第1次的語用論プロセス」に属するが、「意味充足」、「自由富化」や「換喩的転移」(Metonymic transfer)といった操作をここでは想定せず、Griceにしたがって、デフォルトの前提が

起動するという考え方を採用する。

24. Blakemore (1992:148) を参照のこと。
25. Galasinski (2000:115) にしたがえば、騙し(ミスリード)は「不実表示」(Misrepresentation) に帰することができるという。本論でいう「手続き」を「(不実) 表示」という概念に還元できるか否かは、今後検討を加えたい興味深い論点である。

参考文献

- Blakemore, D. (1992). *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell.
- Bok, S. (1978). *Lying*, Sussex, UK: Harvester.
- Coleman, L. and P. Kay (1981). Prototype Semantics: The English Word *Lie*, *Language*, vol 57. 26-44.
- Galasinski, D. (2000). *The Language of Deception*. Thousand Oaks, CAL: Sage Publications.
- Ginsberg, M. L. (ed.) (1987). *Readings in Nonmonotonic Reasoning*. Los Altos, California: Morgan Kaufmann Publishers.
- Grice, P. (1989). *Studies in the Way of Words*, Cambridge: Harvard University Press.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Levine, T. R. (2014). Truth-Default Theory (TDT): A Theory of Human Deception and Deception Detection, *Journal of Language and Social Psychology*, 33 (4): 378-392.
- Levinson, S.C. (2000). *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*, Cambridge, Mass: Cambridge University Press.
- Mearsheimer, J. (2011). *Why Leaders Lie: The Truth about Lying in International Politics*, Duckwood Overlook: Duckwood Publishers.
- Recanati, F. (2001). What is said, in *Syntheses* 128, 75-91.
- Saul, Jeniffer, M. (2012). *Lying, Misleading, and What is Said*, Clarendon: Oxford University Press.
- Taylor, K.A. (2001). Sex, breakfast, and *descriptus interruptus*, *Synthese* 28, 45-61.
- Thomas, J. (1995). *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*, London: Longman.
- Wilson, Deirdre and D. Sperber (1991). An outline of relevance theory, in Konishi T. and K. Sugayama (eds.) *Current Approaches to English Linguistics*. 120-150. Tokyo:Eihosha.
- 児玉徳美 (2004). GCI をめぐって—新 Grice 派と関連性理論の比較—、『語用論研究』第 5 号 (日本語用論学会)、95-109.
- 山本英一 (2002). 『「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論』大阪：関大出版。